

# 神様と天狗の山づくり

昭和六十三年二月五日号

## 山づくりの競争

昔、上野の国（群馬県）の山に悪いてんべが住んでいて、人々に悪さをしていました。

ある日、神々が集まって相談しました。それは、駿河の国と甲斐の国の境へ高い山をつくって、そこから四方を見渡し、悪い神や、いたずらてんべを取り締まろうという相談です。

それを聞いたてんべは

「おおい、そこに集まっている神様たち、わたしと山づくりの競争をしないか。おれが勝ったら、おまえさんがたがつくつた山は、壊し

てしまうというのはどうだ」

と声をかけました。神々は、苦笑いしながら答えました。

「やろしい。だが、おまえが負けたらここから追っ払ってしまうぞ」

「やろしい、一晩のうちにお前たちの山より高いのをつくろぞ」

とてんべは地を掘り始めました。大きな仁王さんのような体で運ぶ土は、もっこいっぱいです。負けるもんかと、どんどん高くしました。

## 逃げたてんべ

てんべは、悠々と掘っていましたが、ふと

気がつくとも東の空が白々としています。あわてたてんぐは、もつこから手がはずれて、土をこぼしてしまいました。

「しまった！」

と思いながら、振り向いてみると、明々と夜が明けた平野の向こうに、神々がつくった山が、高く高く、天へ届きそうにそびえています。それを見たてんぐは、どこかへ逃げていってしまいました。

そのときてんぐがつくった山を榛名山、土を取ってへこんだ所を榛名湖、もつこをこぼした所を一畚山ひとくちというようになりました。

神々がつくった山が富士山で、土は近江ちかみの国（滋賀県）から運びました。土を取った後の大きなくぼみが、琵琶湖びわこになったのだとい

います。

